土佐日記の風土

清水孝之

高知市民図書館

清水孝之（しみずたかゆき）

大正7年　愛知県岡崎市生れ
昭和16年　東京大学文学部国文学科卒業
広島女子短期大学、高知女子大学、愛知県立芸術大学、皇学館大学を歴任　　近世俳諧史専攻　文学博士
著書　『蕪村評伝』『与謝蕪村集』『与謝蕪村の鑑賞と批評』『中山高陽』等
現住所　〒444　岡崎市伊賀町南郷中24番地

土佐日記の風土

昭和62年3月25日　印刷
昭和62年3月31日　発行

3,800円

著　者　清水孝之
発行者　橋田憲明
発行所　高知市民図書館

高知市本町5丁目1番30号
電話　(0888) 21—8111
振替口座　徳島 15276

印刷・製本高知印刷株式会社

土佐日記航路—佐喜浜沖から室戸岬を望む

土佐国分寺蔵　木造薬師如来立像(重文)

藤原時代の檜一木造、像高99.5センチメートル

紀貫之の土佐国府在庁時代からのものと伝えられる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I　土佐日記の景観

一　土佐日記の景観　5
二　土佐国分寺　11
三　大津周辺―土佐の水郷―　14
四　大湊散歩　17
五　土佐日記の気象条件　24
六　土佐日記航海記　40
七　土佐日記新考　52
一　別離と望郷　52
二　風と波との対話　60
三　失えるものへの悲歌　70

II　土佐日記の歴史地理研究

一　近世前期の大湊研究　83
一　土佐日記研究の弱点　83
二　桂井素庵　88
三　谷秦山とその門人たち　93

二　戸部原山の『大湊紀行』　98
一　『大湊紀行』の出現　98
二　『大湊紀行』の著者　103
三　原山の学統と歌道　107
四　登場人物群像　110
五　後世への影響―守部と雅澄―　115
大湊紀行　119
三　嶺南山人の謡曲と能役者戸部家系譜　143
一　嶺南山人作詞の謡曲　143
二　「賤女」「大みなと」「芙蓉」　144
三　「王子猷」　148
四　戸部家系譜　150
四　野見嶺南の土佐日記研究　152
一　はじめに　152
二　家系と師系　153
三　宝暦期の京都遊学　160
四　明和年間の詩歌　165
五　京町退転の理由　168

六　下田村における家庭と家塾　172
七　『大港図記』とその反響　180
五　尾池春水と野見嶺南　191
一　尾池春水の貫之顕彰事業　191
二　春水の『紀氏旧蹟考』　193
三　嶺南の「日江村碑妄評」　197
四　声なき反響　204
六　今村楽の『花園日記』と土佐日記研究　211
一　今村楽略伝　211
二　花園日記　222
三　土佐日記研究　234
七　近世航海資料より見た土佐日記の海事について　248
一　土佐日記の航海について　248
二　参覲交替道　258
三　藩士の航海記録　276

付　土佐の風土と人と

一　忘れられた旅行家　297
一　冨士日記　297
二　池川春水伝　307
三　奥遊日記　323
二　霍公鳥―『山斎集』の動物季節―　336
一　はじめに　336
二　記録と分析　341
三　大動機　350
四　小動機　354
三　晩学と晩節と―広田孝一氏追悼―　364

あとがき

口絵写真　「佐喜浜沖から室戸岬を望む」「木造薬師如来立像」　撮影田辺寿男

土佐日記の風土

あるものと忘れつゝなほなき人を
いづらと問ふぞかなしかりける　土佐日記

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I

土佐日記の景観

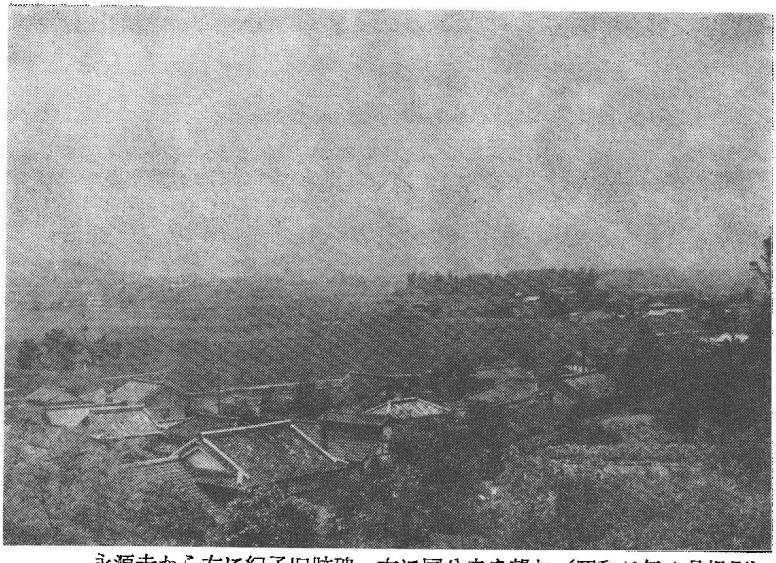
一　土佐日記の景観

をとこもすなる日記といふものを、をむなもしてみむとてするなり。それの年の十二月の二十日余一日の日の戌のときに門出す。その由いさゝかにものに書きつく。

こうして書残された『土佐日記』が、仮名日記の初めとして、重要な文学史的位置を占めるのみでなく、考古学遺跡遺物についで、古代末期土佐の人間と自然とを興味深くうかがわしめる唯一の作品であることは、今さらいうまでもない。

台風九号と十号の間に恵まれた梅雨の晴間に、国道三二号線側から岡豊城跡の頂上をめざしてのぼる。細い流水路は間もなく膝を没する雑草に覆われてしまう。赤いツツジ、紫の小花が草むらの中にひそみ、サルトリイバラが足もとをさえぎる。黒紫色に熟れた、思いがけぬヤマモモの群生。頂上は近いのだが、道はその辺で深い笹むらにさえぎられてしまった。

あの青田の中、横に広がる森が国分寺、その彼方に白く光る大きな屋根が土佐山田町のタバコ工場。右手のヤマモモの木に向って蛇行してくるのが国分川。左手の国道がゆるやかに下る八幡部落の向うに、国分、比江のイラカの群が、初夏の光を照り返している。そこは『古今和歌集』撰進のスター紀貫之が、六十歳前後の四、五年間を、従五位の下土佐守と



永源寺から左に紀子旧跡碑、右に国分寺を望む（昭和40年6月撮影）

して治政のかたわら『新撰和歌』の撰集につとめた舞台だ。

小道を右に折れて国分の部落にはいる。小学校のT字路にある史跡案内図はペンキもはげ落ちて、半ばは文字もさだかでなく、いかにもうらぶれた観光地の感じである。

国府遺跡を展望するには日吉山にある曹洞宗永源寺境内がよい。白鳳朝末期の比江廃寺の五重の塔も日吉神社の森を抜んでて聳え建っていたであろう。左方、国分川に近いビニールハウスの辺が国庁跡、中央の木立が有名な紀子旧跡碑の群だ。国分寺までは僅かに一キロメートルの距離。あいにく、モヤがかかって、そのかなた一里の大津、鹿児崎はしかとは望めない。しかし平地に立った時の四周の山々のたたずまいは、太宰府に似た景観を持つ。一帯の田畑と丘陵と河川をふくむ全体の景観こそ、古代をしのぶ貴重な遺跡なのだ。

江戸時代も半ばを過ぎた天明五年（一七八五）、歌人政治家尾池春水が比江村の高村家と力を併せて建立したのが、

あふぐ世にやどりしところ末遠くつたへむためとのこすいしぶみ

権大納言資枝

と刻まれた紀子旧跡碑である。ホノギをダイリと称し、その辺から古瓦を多く出土したという。しかしコクチョウその他

のホノギも他国の国府遺跡発掘調査からは、必ずしもそのまま信頼するに足りないという。沢山あった礎石は藩政中期以前に既に川普請に利用されて、ほとんどが消滅してしまった現状からは、大厦高楼群の正確な遺跡など推定しようもないのである。「住む館」即ち紀子旧邸などは、門出間際に失った鍾愛の娘の墓と共に、雲をつかむような話に過ぎない。それでもこうして貴重な耕地の一画が保存されてきたことは、土佐を紹介してくれた最高の恩人に対する深い感謝と敬慕とを示していて、心暖まることだ。間もなくここも、夏草に覆われるだろうが、秋から春にかけて『土佐日記』を懐に、千年の昔を懐古する憩いの地になるのだからありがたい。「土佐日記懐にあり散る桜」という高浜虚子の簡素な石碑も建っている。

土佐国分寺の完成は梵鍾や出土古瓦から奈良末期ないし平安初期と推定されている。史跡「土壇」の一部残存によって、境内は狭まったが、創建時代の位置を確実に示している。長宗我部元親再建の金堂のコケラブキ屋根の線も美しいし、堂内の木造薬師如来立像は藤原時代の佳作である。境内にはそこはかとなき歴史の重みと静けさがたちこめていて、いつ来ても奥床しい限りだ。塔の心礎や礎石をあしらった庭園には、丸く刈りこまれたアシビの新芽がツクツクと威勢よく伸びていて清々しい。

大津の飛鳥山は指呼の間にあるが、門出の一行は、夜更けて「船にのるべき所へわた」らねばならなかった。地理学者によると県道中島線が平安時代の汀線と推定されてきたが、それは大津の船つき場を今の舟戸とする鹿持雅澄の『土佐日記地理弁』の不確かな説に基づいているようだ。最近では明見、関、高天原一帯の古墳群、或いは飲料水の有無の点から、浜田春水氏の関説が有力と考えられる。岩崎の突端の下の舟戸あたりが、どのていど陸化していたか、分らない。一片の遺跡標柱を建てて満足するのは、最も安易な気休めの処置ではなかろうか。

天竺城跡西側の山が切りくずされて、土讃線大津駅の北方が埋立られつつある。関から飛鳥山への小道をのぼる。ク

飛鳥山から中央に鹿児山、舟入川を望む。左手遠方に五台山、右手に国分川
（昭和40年3月撮影）

モの巣をかきわけ、小枝を払いながらたどっても、道は墓地の中に消えてしまう。犬も通らぬ、道なき道だ。迷い迷いして、ようやく標高六五メートルの西側に出た。大きな松が日かげを作っている。

中央高校の南の山が完全に削られている。眼下に舟入川がカーブを描いて曲りくねり、鹿児崎を迂回して高須山に向う。五台山麓には長い青柳橋もみえる。高知港の工場の煙は地をはうように北へなびく。ここから見渡す限りの青田には、広々とした浦戸湾の海水が満ち引きしていたのだ。

三月に来た時よりも、ビニールハウスは減ったが、田辺島通りの塩どめ堤より手前の水田に、工場団地の造成が進んでいる。やがてその中央を産業道路が東西に走る頃には、景観は一変してしまうであろう。遠い昔に、滄海変じて水田と化した。今、人間生活の進歩に応じて地上の様相が転変しようとも、それは産業経済のためにはむしろ喜ぶべき現象であろう。しかしわれわれは奈良や京都における愚かさを繰返すべきではない。一部地点の史跡指定などよりも、より広範な空間を法的に規制する観光行政が望ましい。田辺島下流の国分川が大河の姿を見せて、太くたくましく光る。

前の国司一行が「大津より浦戸をさして漕ぎ出」でたのは、承平四年（九三四）十二月二十七日のことである。その日、快晴。渚の葦の間には鴨が群れ、海は深々と碧い空を映していた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com